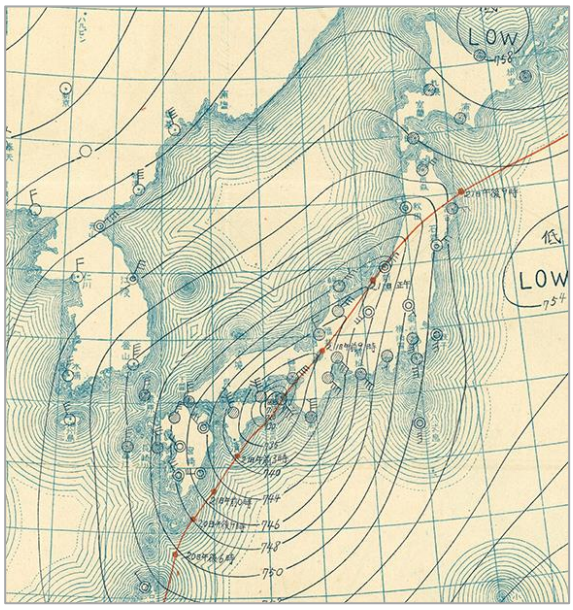
昭和９年　室戸台風【昭和９(1934)年９月19日～21日】

■気象の概要

９月 21 日午前５時頃、高知県室戸岬付近に上陸した超大型で猛烈な台風は、当時の世界最低気圧を更新（684 水銀柱 mm、現在の 911.9 ヘクトパスカル）し、瞬間最大風速も 60m/s を記録しましたが、それ以上は器機の故障により測定できないほどでした。午前８時頃、大阪～神戸間に再上陸、近畿、北陸を縦断したあと東北を横断し、午後６時頃太平洋に去りました。

台風の進路の左側（西）にあたる岡山・鳥取県では、19 日から降り始めた雨は 20 日には豪雨となり、中国山地から日本海沿岸では 300～450mm の雨量となりました。岡山県南部は 100mm 程度の雨でしたが、上流部で多くの雨量があったため、河川が氾濫し被害が発生しました。一方、進路の右側（東）にあたる京阪神地域では、雨量は多くありませんでしたが、強風による建物の倒壊と 4mを超える高潮によって大阪を中心に大きな被害となりました。



９月 21 日午前６時、上陸直後の手書き天気図（等圧線は水銀柱ミリメートル、予測進路が記入してある）【出典：気象庁「天気図」】

■被害の状況

室戸台風の被害は、岡山県、鳥取県を中心として中国地方の広い範囲に及んでいます。死者・行方不明は 262 名にのぼり、明治 26 年(1893)10 月の台風以来の大きな被害でした。被害の多くは大雨による河川の氾濫と土砂災害によるものでした。

岡山県では旭川の決壊により岡山市街地は浸水し、後楽園も大きな被害を受けましたが、高梁川下流では直轄河川改修（一期）が完成していたため、倉敷一帯の被害は抑えられました。鳥取県では天神川流域で河川の氾濫と大山山麓の土砂流出による被害が大きく、これを契機に天神川直轄改修と上流部の直轄砂防が開始されます。

岡山市桜の馬場（現・丸の内）の決壊箇所

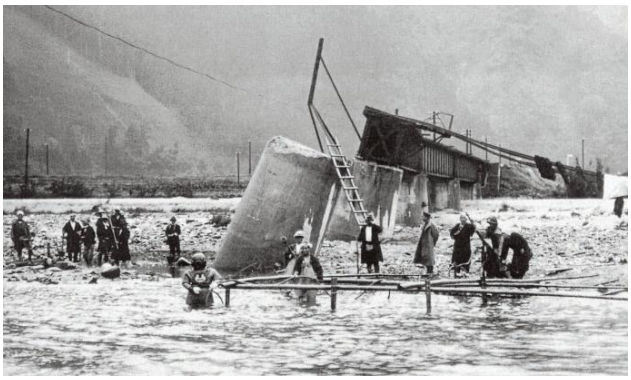
岡山市、小橋付近に山積した流木

岡山市内山下、公会堂通り（現・県庁通り）の浸水状況

津山市、流出寸前の今津屋橋

【このページの写真４点資料提供：岡山県立図書館・電子図書館システム「デジタル岡山大百科」の『昭和九年九月風水害被害状況』】

倉吉市、旧打吹駅（現・明治町）付近の惨状
【出典：建設省倉吉工事事務所「大山砂防」】



落橋した伯備線の第三日野川根雨鉄橋
【提供：国土交通省 中国地方整備局】

■室戸台風の主な被害

区分		単位	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	中国計	全国
人的被害	死者	人	74	12	110	12	3	211	2,702
	行方不明	〃	7	−	42	2	−	51	334
	負傷者	〃	51	14	420	12	3	500	14,994
住家被害	全壊・流失	棟	385	51	1,935	439	25	2,835	92,740
	半壊	〃	360	60	2,625	265	18	3,328	
	浸水	〃	20,863	5,195	46,131	378	501	73,068	401,157

※全国数値は理科年表による

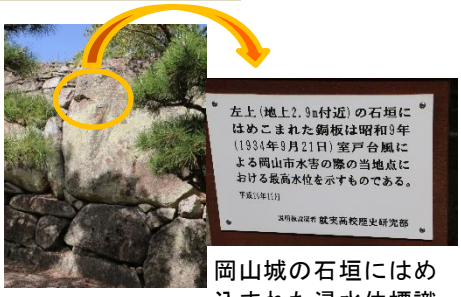
災害の記憶を伝える

室戸台風の後、内務省（国土交通省の前身）などが旭川の氾濫による浸水位標識を設置しました。その後の街の変化に伴って失われたものもありますが、現在では岡山市内で 14 箇所に保存、復元されており、洪水の脅威を今に伝えています。

倉敷市真備町下二万の小田川沿いには室戸台風で亡くなった人の供養塔があります。

中国銀行本店角に保存されている浸水位標識と説明版

※標識・碑の写真をクリックすると位置が表示されます



岡山城の石垣にはめ込まれた浸水位標識と説明板

溺死群霊供養塔

災害に強い地域づくりを目指して

室戸台風で流失した岡山県下の主な橋梁の復旧にあたっては、従来の木橋からコンクリート、鋼鉄の永久橋へ、特に長さ 70m 以上は鋼橋とすること、将来の交通を考慮して幅 5.5m とすることなどが方針とされました。これに基づいて、洪水を安全に流すため、できるだけ橋脚間が長くとれる形式を採用しながら多くの橋が架けられました。現在、その一部は「土木学会選奨 土木遺産」に選定されています。
【詳細については、当会ホームページ「土木遺産アーカイブス・岡山県」参照】

田井橋（昭和 12 年完成）

方谷橋（昭和 12 年完成）

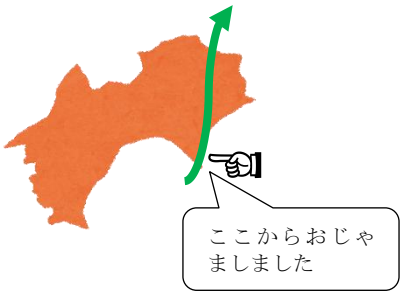
大原橋（昭和 17 年完成）

トピックス

●台風の 名前をめぐる エトセトラ

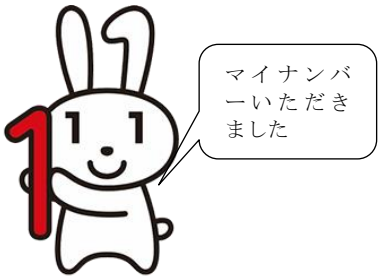
・台風は、北西太平洋または南シナ海に存在する熱帯低気圧で、内部の最大風速が約 17.2m/s（34 ノット）以上まで発達したものを言います。

・昭和 21 年(1946)までは個々の台風に正式名称は無く、室戸台風、周防灘台風、枕崎台風などのように上陸した地点や大きな被害のあった地名を冠して通称で呼ばれていました。しかし、昭和 17 年頃から日本では、便宜的に台風に年の発生順に番号を付けていたようです。昭和 16 年 12 月に太平洋戦争が開戦し、気象管制が敷かれることに関連しているかもしれません。



・昭和 22 年(1947)からは米軍合同台風警戒センターによる英語名（当初は女性名のみ、1979～1999 年は男女名）が国際的名称として付けられるようになりました。これが台風の正式名称の始まりです。終戦直後の枕崎台風にも遡って「アイダ」の名が付けられています。ただし、以前からの番号制も一部には残っていたようで、通称枕崎台風は、国際名「アイダ」、「昭和 20 年台風 16 号」でした。

・昭和 26 年(1951)にサンフランシスコ平和条約に調印、翌 27 年 4 月発効し、日本の主権が回復します。これによって昭和 28 年の台風 2 号（国際名ジュディ）から国内でも正式に番号制が導入され、報道でも使用されるようになり、以降、番号名と国際名の 2 本立てとなります。ただし、1999 年までは気象庁が台風と認定して番号を付けても、合同台風警戒センターが認定しなかった場合、国際名が付けられない場合もありました。



・2000 年からは、台風の国際名は英語名から台風委員会が制定する「アジア名」に変更されました。加盟国 14 国が 10 個ずつ提案した名前が使用され、日本は、「コグマ」「ヤギ」など星座に由来する名前を提案しています。ここからは日本の台風番号に国際名が付かない台風は無くなりました。

・気象庁は、顕著な災害をもたらした自然現象（豪雨、台風、地震等）に、後世への伝承の観点から固有の名称を定めています。台風では昭和 33 年(1958)の「狩野川台風」が最初ですが、遡って昭和 29 年(1954)の「洞爺丸台風」から命名されています。令和元年の 2 つの台風には、沖永良部台風以来 42 年ぶりに命名されました。

■気象庁が命名した台風

気象庁命名	番号制名称	国際名	年　月
洞爺丸台風	昭和29年台風第15号（台風5415）	Marie（マリー）	1954.9
狩野川台風	昭和33年台風第22号（台風5822）	Ida（アイダ）	1958.9
宮古島台風	昭和34年台風第14号（台風5914）	Sarah（サラ）	1959.9
伊勢湾台風	昭和34年台風第15号（台風5915）	Vera（ヴェラ）	1959.9
第2室戸台風	昭和36年台風第18号（台風6118）	Nancy（ナンシー）	1961.9
第2宮古島台風	昭和41年台風第18号（台風6618）	Cora（コラ）	1966.9
第3宮古島台風	昭和43年台風第16号（台風6816）	Della（デラ）	1968.9
沖永良部台風	昭和52年台風第 9号（台風7709）	Babe（ベイブ）	1977.9
令和元年房総半島台風	令和元年台風第15号（台風1915）	Faxai（ファクサイ） ラオス命名：女性の名前	2019.9
令和元年東日本台風	令和元年台風第19号（台風1919）	Hagibis（ハギビス） フィリピン命名：「素早い」	2019.10